

ストレスコーピングとLOCから分析する実習前後の学生心理

Research of the Coping with Stress of Occupational Students Before/After Clinical Training

中島 ともみ/田口 真司

Tomomi Nakajima / Shinji Taguchi

日本医療福祉専門学校 作業療法学科

Department of Occupational Therapy, Japan college of Medical Care and Welfare

キーワード：学生心理・ストレスコーピング・Locus of Control

I. はじめに

作業療法教育の現場において、学生の質的变化が言われ始めて久しい。養成校では教員は学生心理の把握に苦慮しており、これらに関する先行研究は多い。そこで今回、学生の実習前後のストレスコーピングの変化を検討した。また、ストレス対応に影響を及ぼすと推測した¹⁾自己統制感を同時に調査した。

II. 対象と方法

対象は、N作業療法士養成校における2年次の学生26名。評価実習前後にラザルス式ストレスコーピングインベントリー (SCI)²⁾とLocus of Control (LOC)³⁾を実施、同時に「落ち込んだ時にそれを解消する方法」のタイトルを提示して400字前後で記述させた。SCIは、実習前後の結果でU検定を行った。その後クラスター分析、判別分析を行い実習前後のクラスターの変化を比較した。また記述形式の調査は、ラベル名をつけカテゴリーにまとめる形でその質的变化をSCIと併せて比較検討した。LOCも同様に実習前後についてU検定にて検討した。コーピングとLOCとの関連については、Spearmanの順位相関係数を用い検討した。

III. SCIの結果と考察

実習前におけるSCIに挙げられていたストレスフルな出来事は、学業に関する事が半数。その他は友人知人との人間関係、体調、生活上のトラブルに関する事であったが、実習後の実施では26人中20人が実習に関する事を挙げた。実習前後のコーピングの変化では、Pla (計画型)において有意 ($p < .01$)に低くなっていた。一方、Acc (責任受容型)とPos (肯定評価型)では有意 ($p < .05$)に高くなっていた (表1)。Pla (計画型)のコーピングが有意に低くなっていることは、実習中の冷静さの欠けた短絡的な行動が示唆された。一方で、Acc (責任受容型)・Pos (肯定評価型)が高くなっている事は、学生が実習に

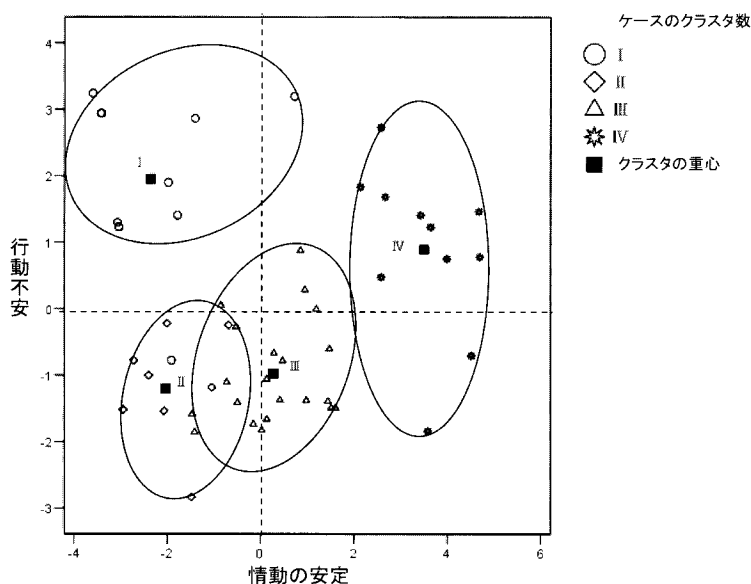
表1. 実習前後のストレスコーピング

	検査時期	順位和	有意確率
Co	前	611.00	0.153
	後	767.00	
Em	前	685.50	0.949
	後	692.50	
Pla	前	838.00	0.004**
	後	540.00	
Con	前	632.00	0.275
	後	746.00	
See	前	634.00	0.29
	後	744.00	
Acc	前	578.50	0.037*
	後	799.50	
Sel	前	714.50	0.618
	後	663.50	
Esc	前	695.00	0.909
	後	683.00	
Dis	前	723.50	0.49
	後	654.50	
Pos	前	567.00	0.019*
	後	811.00	

対し自身の責任を果たし、その努力を肯定的に評価している様子を伺わせた。

SCIのクラスター分析後の判別分析の結果、Acc (責任型)とEsc (逃避型)の要素が高く問題回避も気分転換に用いるが、自分自身の責任感もある<情動の安定>を求める横軸と、Pla (計画型)が高くPos (肯定評価型)が低い、悩んだ結果の行動に自信が持てない、自己肯定の低い<行動不安>を縦軸とした4タイプに分類できた (表2)。コーピングを用いるタイプ別に、Pla (慎重型)のみが高いグループ (タイプI)、社会的支援模索型のみが高いグループ (タイプII)、計画型・責任需要型・肯定評価型の3型が高いグループ (タイプIII)、Dis (離隔型)以外全てのコーピングが高いグループ (タイプIV)の4クラスタに

表2. SCI クラスタ分析結果



分類された(表3)。タイプIは認知的・情動的ストラテジーの両方とも低く、問題解決に向けての一定の努力は認めるが、対処スタイルの多様性には乏しい⁴⁾。タイプIIは認知的・情動的ストラテジーとも低く、対処スタイルが支援模索のみ。タイプIIIは、コーピングこそ問題解決に向けて積極的とも思える認知的ストラテジーをよく用いているが、自己の情動を制御し安定を図るような対処は、認知的ストラテジーと比較して有意に少ない。タイプIVは、認知的・情動的ストラテジーの両方とも高く、問題を回避する傾向もあるが、全体的に多様な選択をする傾向がみられる。ただし、前述の4タイプとも自分と出来事の間を切り離すDis(離隔型)のコーピングは低い傾向が見られた。離隔型のコーピングは、通常「問題は自分と関係がないと思う」「問題や苦しみを忘れようと思う」等の思考と言われ、一見肯定的なコーピングとはとらえられないが、評価用紙の質問文は「その問題の明るい面や良い点を探してみるようにした」「視点を変えてみたら小さな問題に過ぎない事がわかった」「いろいろやったので、後はなるようにしかならない」「よく考えてみたら、たいした問題ではないと思った」等もあり、自己の思考レベルで認知面の転換や変化を試みる⁵⁾再考型⁶⁾のコーピングであるとも言えるのではないかと思われた。

記述式のカテゴリライズでは、ほぼ全回答者で気分転換目的の逃避行動を取っていたが、友人と遊ぶなど他者が介入するタイプと、独りでできる活動を用いるタイプとに別れた。また、タイプIVの学生で気分転換の後、原因究明や対処法の分析と言った能動的な行動を取っている記載が見られた。

タイプIは実習後では大幅に減少し、タイプIIタイプIIIに増加傾向を認めた。タイプIは、多くがタイプIIへの変容で、一部タイプIIIになっていたが、コーピングの多様なタイプIVになる者はいなかった。タイプIIIは多くがそのままであったが、一部がタイプII・IVになり、タイプIにな

る者はいなかった。タイプIVは、半数がそのままであったが半数がタイプIIIになり、ストレスが高い状況では情動的ストラテジーをうまく用いられない様子が伺われた(表4)。以上の事から、常にコーピングの多様性に乏しい者は、より高いストレスにさらされてもすぐに柔軟な対処はできない。また、通常多様に用いられていても、より高いストレス状態におかれるとコーピングの多様性は下がることが推測された。

IV. LOCの結果と考察

LOCにおいては、実習前後で有意差が認められないが、若干の上限の上昇傾向が見られた(表5)。人はコーピングの採用に関して、状況を自らの手でかえられそうであると判断すると、認知的コーピングを採用し、その逆であれば情動の調整に向かい問題からは回避の姿勢を取るといわれている⁷⁾。しかし今回、コーピングと自己統制感に有意差な相関性を認めなかった。今後は対象数を増やし、さらに実習成績との関連性を検討する必要があると思われる。

V. まとめ

学生のストレスコーピングをラザルス式SCIの結果のクラスタ分析によって4タイプに類別した。4タイプとも共通してDis(離隔型)のコーピングは低い傾向が認められた。実習前にコーピングの多様性に乏しい学生は、高いストレス下でも多様なコーピングを採用する事ができない傾向が見られた。今後は、コーピングのタイプ別にLOCの高低が、実習成績にどのように関係するか対象数を増やして、検討していきたい。

文献

- 1) Richard S. Lazarus Susan Folkman: ストレスの心理学 [認知的評価と対処の研究]. 66-70, 実務教育出版, 19991.

表3. SCI クラスタ分析結果

	I	II	III	IV
Pla	4.36	2.22	3.90	4.27
Con	1.55	2.33	2.81	3.00
See	2.64	3.00	2.86	3.00
Acc	1.64	2.44	3.52	4.18
Sel	2.00	1.78	2.76	3.09
Esc	1.27	1.67	2.05	4.45
Dis	1.64	1.33	1.48	2.55
Pos	1.55	2.33	3.52	3.45

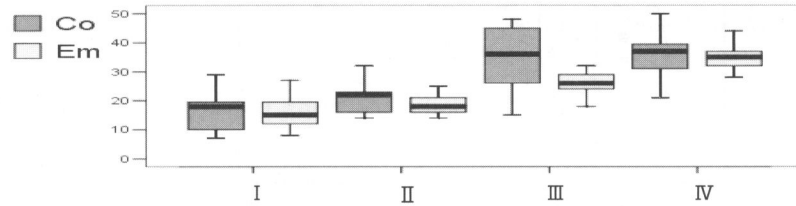


表4. 実習前後のストレスコーピングのクラスタ変化

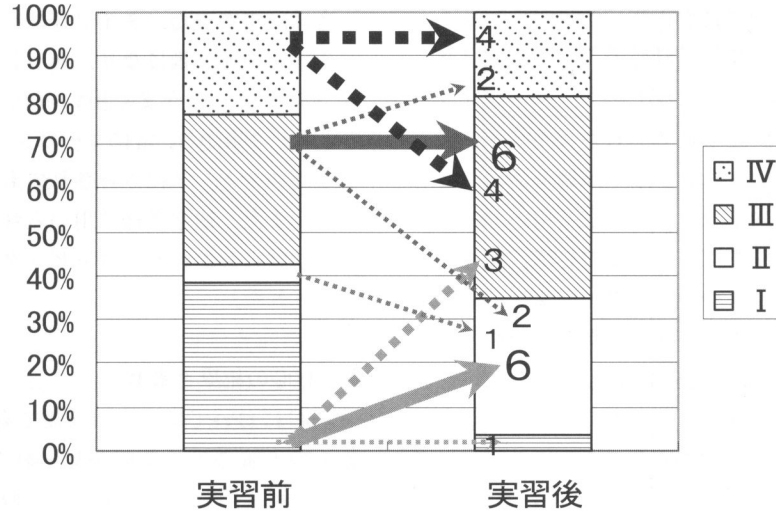
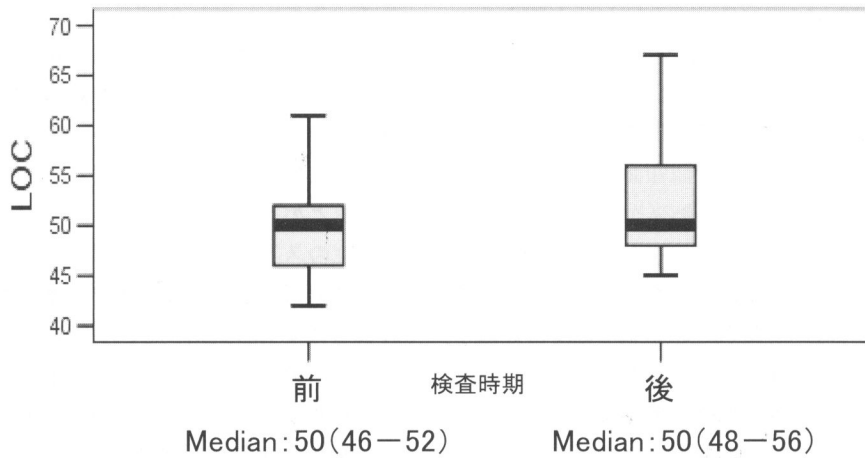


表5. LOC 実習前後



2) 日本健康心理学研究所 著：ラザルス式ストレスコーピングインベントリー (SCI)。実務教育出版, 1996。
 3) 鎌原雅彦 樋口一辰 清水直治：Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討。Jap.of. Psychol, No.4. 38-43. 1982。
 4) 神村栄一 著：ストレス対処の個人差に関する臨床心理学的研究。

96-98 風間書房, 1966。
 5) 中山和美 寺田真廣：看護学生の長期実習前後の心理変化と実習成績の関連に関する研究。昭和医学会誌 66：1. 29-37. 2006。
 6) 尾関友佳子 原口雅浩 津田 彰：大学生のための心理的ストレス家庭の共有分散構造分析 健康心理学研究 7：2. 20-36. 1994。